
魔術師!!REINE

林川 理都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師！！REINE

【Zコード】

Z5223BA

【作者名】

林川 理都

【あらすじ】

魔術師になりたいと願う少女。租田玲音。

その玲音が魔術を完璧に習得するまでの物語です！

登場人物紹介！

* 〃 *

メインキャラ（主人公）

租田 玲音 そだ れいね 13歳

魔術練習中。

魔術師の兄、そだれいね 租田玲夢に魔術を教えてもらっているが全く上達しない。

家族からある意味すごいとよく言われている。

この小説の主人公。

魔術歴：1年

租田 玲夢 そだ れいむ 17歳

魔術師の一人。

4歳年下の妹、そだれいね 租田玲音に魔術を教えて欲しいと言われ今、教えて

いる途中だが、妹の覚えの悪さに兄も悪戦苦闘している。

魔術歴：4年

租田 幸秋 そだ ゆきあき 65歳

魔術師の一人。

玲夢、玲音の祖父。租田家で一番最初に魔術を教えた人。

現在、隣の家で來子、栄と住んでいる。

魔術歴：48年

故 永藤 初栄 えとう はつえ (31歳)

(魔術師の一人。

租田幸秋に魔術を教えた。魔術を一番最初に作り出した人。

魔術を世界中に広めようとしたが、しかし誰にも信じてもらえず、唯一、租田幸秋（れいむ、玲音の祖父）に信じてもらい、魔術を教えた。

租田幸秋が28歳の時（当時・魔術歴：11年）、永藤初栄が交通事故にあい、31歳（当時・魔術歴：13年）でこの世を去った。（

現 永藤 えとう 初栄 はつえ 30歳

魔術師の一人。

租田幸秋が35歳の時（当時・魔術歴：18年）、永藤初栄をよみがえらせた。

初栄もその技術に驚きながら、幸秋にお礼を言った。

現在同姓同名の人が居ると怪しまれるので「租田 泉美」と言う偽名を使って生活している。ちなみに、間がらとしては、租田幸秋、來子が養子として一緒に暮らしている。という事になっている。

現在、租田家の隣の家に租田幸秋、來子と一緒に住んでいる。

サブキャラ（登場人物）

租田 そだ 和美 かずみ 41歳

れいむ、玲音の母親。魔術師の一人。

この家に来て魔術を使っているのを見て驚いた。

魔術歴：17年

租田 そだ 菊秋 きくあき 41歳

れいむ、玲音の父親。魔術師の一人。

魔術は子供の頃か教えてもらっていた。

魔術歴：31年

租田 そだ 來子 くるこ 67歳

れいむ、玲音の祖母。魔術師の一人。

和美と同じくこの家に来た当初は魔術を使っているのを見て驚いた。

魔術歴：25年

登場人物紹介！（後書き）

第1話は後程

【第1話】浮遊術練習ーー？（前書き）

早速、第1話です！

【第1話】浮遊術練習！？

【第1話】浮遊術練習中？！

「まず、昨日の復習！？」

れいねに、兄のれいむが氣合いでを入れるよひよひ言つた。
「れいね、部活は？」
母のかずみがれいねとれいむの話しているのに、お構いなくれいね
に尋ねた。

「今日ない！」と一言でれいねがはなしをすませた。

「では、氣を取り直して昨日の復習！」とれいむがまるつきり同じ
セリフで言つた。

「はい！兄ちゃん！」

やる氣満々にれいねが大声でそう言つた。

「んじや、まづその紙！浮かせてみる。」

れいむが玲音に指示を出した。

れいねが紙を持ち「はい！」と言つた。

その自信は何処からわいてくるのだろうか。

れいむがバシッ！とれいねの後頭部に平手打ちをくらわせた。

「お前はやる氣あるのか！！！」れいむが怒り半分でそう言つた。

「えへー」頭を痛そうに抱えながら、れいむを挑発するかのよひよひ

言った。

「えへーじゃねえよ」れいむが本氣で怒りだした。

「はー！すみませんでした！」れいねがすゞコオーラにおわれながら頭をぺこぺこ下げて誤つた。

「氣を取り直してもう一回、んじゃあ、わざと回じよひ紙を浮かせてみな。」

まだ、少し怒りながらもれいむがれいねこさつきと回じよに指示を出した。

れいなか本気だのが本気じゃないのがは定かではないか
ている、、ようにも見えなくもない。

フワッ！

「あつ、浮いたういた！ 浮いたよ兄ちゃん！」
れいねがすごい興奮してれいむにそう言つてきた。

「ばーが、俺が浮かせたんだよ！」「れいむがやつを馬鹿にしたお返しと聞つかのよし」、れいねを馬鹿にした。

れいねがすかさず言い訳に入る。「嘘じやないもん！ 本当に私が浮かせたんじもん！」

「それはどうでしょうねー」
れいむが、ますます挑発させるような言い方をした。
そこで、れいねがキレた。

「兄ちゃんの、馬鹿！ アホ、カス！ …！」

れいむが単純な挑発にのつてしまつた。

バツ！ …！

「何だこれ？ 体が浮いていく、卑怯だぞ！」

そう言いながら、れいねの体がどんどん宙に浮いていく。

「お前が魔術つかえねーのがいけねーんだろ！？」 半分、怒つたよう

にれいむがいつた。

「何、騒いでるの？！」 飯にするわよ！ 早く降りてきなさい。」

階段の下から、母のかずみが呼んだ。

「はーい。」

返事を、れいむがしながられいねを床の上に落とした。

「いで！ 痛いじゃないか！？」 らいねがドンッとごぶい音をたてて下に落ちた。

「お前が、魔術使えないからだろ？」

れいむが呆れながらそう言つた。

「れいねがまともに、魔術が使えるようになつたら勝負してやつてもいいぜ」

れいむが上から目線でそう言つた。

「この・・・ らいねが、すごい頭に來ていたのか顔を真っ赤にしている。」

その時、フワツとれいむの体が浮かんだ。

「えつ！？」 らいねがれいむが浮いているのを見て驚いた。

『えつ、もしかして私が兄ちゃん浮かしてるの！？』

「おひ、おい！ れいね何した！？」 れいむが慌てて、れいねに聞いた。

「知らないよ！ って言つたどうすればこの術解けるの！？」 れいねが大慌てでそう聞く。

れいむが慌てて術の解き方をれいねに教える。「俺に集中するな！ そうすれば術は解ける！」

それを聞いたれいねは、れいむから背いたが依然、術は解けない。「こいつの術はどうなってんだよ！」 れいむが声を荒げながらそう言った。

れいねが「えひ、どうすればいいの！？」 とれいむに聞くが「しらねーよ！ お前の術だろ！ 自分で解け！……」 と言しながられいむが部屋の中をさまよっている。

「ええ？」 れいねがそう言いながら、ふと前を向くと子猫が！

「猫！」 と言いながられいねが猫を触り出したと同時にれいむにかかっていた術も解けた。

「あー、びっくりした。どうなってんだよ。マジであいつの術は」といしながら猫を触つているれいねの服をもつてリビングに行こうとする。「あ・・・猫！」 と言いながられいねが引きずられていく。

「へえー、れいね浮遊術使えるようになつたんだー」 母のかずみが関心したかのように言う。

「すごいでしょ！」 らいねが威張つてそう言った。

「まあ、俺を浮かせたあげく術解けなくなつて、しまいには猫さわり始めたからな。」 らいむがおかげをほおばりながらそう言った。

「今、解けてるじゃん！」
「れいねがれいむの言い間違えたと
ころをすばり言った。

「うぬせーなー」とれいむが言いながらまたおかげばかり食べている。

「れいむ！ おかげばっか食べてないでちやんと『」飯も食べてよー。」
かずみが不機嫌そう言った。

一 食べてゐる……

۱۰۰ نظریه انتخاب

かずみがれいむの茶わんを見て、ご飯が残つてゐるのに築いた。
あつ、れいむ、『ご飯残つてゐる、ちゃんと食べなさい』

「無理。もう食えない。」れいむがイラついたよつこにいながら、リビングから出て行こうとする。

「待ちなさい！」とかずみが言うと同時にれいむの耳が引っ張られるように、元へ戻つてくる。

「わかつた、わかつたから！」　れいむが涙目になりながらそう言う。

そして、一瞬でご飯を食べきった。

「最初からちゃんと食べきればいいのに……」かずみが呆れたよつこ
言つ。

ライラをぶつけるように「知らないしー」と曖昧な返事をしながら、ライラを兄のれいむにぶつけた。

ピーンポーン…

「はーい」母のかずみが玄関に行き「あつ、おじいちゃん入つて」と言つとその声に反応して、れいむとれいねが一目散にリビングに向かう。せまい階段を我先にとれいむとれいねが押し合ひをしながら下りてきた。

先にれいねが大きい声で「おじいちゃん！」と呼んだ。

「もお、階段は静かに下りてきなつて何回言えばわかるのー？」とかずみが不機嫌そうに言つ。昼からかずみはずつとこの調子だ。

「まあまあ」とそこには祖父の幸秋が仲裁に入る。れいむは呆れ顔でかずみとれいねを見ている。

終始沈黙が続き、そこに幸秋が「あつ、そつそつかずみさんこれ」と差し入れの畑でとれた野菜の詰め合わせをかずみに渡した。野菜の詰め合わせと言つても、なす、きゅうりなどの野菜がスーパーの袋に入つてるだけ。

「あれ、何かおじいちゃん、野菜だけにしては重たくない？」かずみは手渡された袋をもつて異様な重さに気付いた。

「野菜、出してごらん」幸秋が微笑みながらそう言つた。

「ん？」かずみが緑と黒のしま模様の物を発見した。「スイカだ！」とれいむとれいねが声をそろえて言つた。そこには小玉スイカが3個程入つていた。

かずみが「有難うございますう」といい一礼し感謝の意を表した。

「いえいえ、それにもしても今日は暑いねー」と幸秋がハンカチで汗

を拭いながらそう言った。

すかさず、かずみが「よかつたら、涼んで行きます?」と親切に言う。

「ああ、助かるよー、俺の家クーラーないからー」と言いながら、その言葉を待つてましたーと言わんばかりに、幸秋が嬉しそうに言った。

その間、れいねが「スイカ、食べよーねえ、食べよひよー」とずっと横でうるさい程言っていた。

かずみが「わかった、わかったから、和室行つてな」とかずみが強引にれいねを和室に入れた。その後ろをついて行くようにれいむが入つていく。

「じゃあ、俺も・・・」と幸秋がれいむの後ろをついて行くように入つていいく。

「あつ、びうそ」ともつ幸秋が和室に入つてからかずみがそう言つた。

そして、かずみはキッチンの方で幸秋に出すお茶とお茶菓子を用意して持つて行き、幸秋の方へ差し出した。
「お母さん、スイカも!」とかずみにれいねが言つ。
「待つてなさい、今持つてくるから」とかずみが半分怒りをあらわにして言つ。

そして、スイカを持つてくるとかずみは早速、幸秋と話始める。
かずみが「おじいちゃん、おばあちゃんといすみさんば?」といきなり幸秋に聞き始めた。
「來子は、仲間と旅行。いすみは夕飯の買い出し。」とすらりと言
いながら、お茶菓子の煎餅をぱりぱり食べながら答えた。

「おじいちゃんも何処か出掛ければいいの」「とかずみが言つと同時に」「うまいーーーーー！」とスイカを食べてゐるれいねが大声で言つた。その瞬間れいねの頭を叩きながら「うるさいーーーーー」とかずみが切れた。それでも、めげないれいねは、今度はおじいちゃんに「ねえねえ、じいちゃん！ 今日ね私ね！ 浮遊術使えるようになつたのーーー」と嬉しそうにその事を幸秋に知らせた。

「浮遊術つつても、俺にムカついて俺を浮かせただけだけだ。れいむがれいねの浮遊術は偶然使えただけだ。どうようこれいねに言葉を返した。

「でも、浮遊術を使えたのは、すじこよーーーー」と幸秋が関心しながら言ひ。

「じいちゃん、聞いてよーーーー れいね紙屑も浮かせられないのに俺を浮かしたんだよ？ 何か基準がおかしくない？」と少しぐれいねを馬鹿にするように言つた。

「うーん、かずみさん！」幸秋が何か思いついたのか、かずみを呼んだ。

「あつ！ はいっ。」かずみが話の輪に入れないのでボーッつとお茶を飲んでいて急に呼ばれたからか、これがいつもと違つた。

「何か重くて大きい物ありますか？」と幸秋がかずみに聞いた。

「大きくて、重い物・・・あつ！」かずみがピンと来たのか廊下にて自分の部屋に向かつた。

ドサッ！

「何・・これ・・・・・れいねが呆れたよつて言つた。

「あー、これ、ずっと前の雑誌そのまんまとつておこて、いつなつた（笑）。

（いやいや、いつなつたって・・・）一同が沈黙した…

「取りあえず、これを持ち上げてみて」幸秋がその場の空氣を直すよつこにそう言つた。

「おじいちゃん、それは無理だよ」とれいむがあきらめたよつこ言つた途端にフワツツと

雑誌の束が浮いた。

「・・・えええ！？」れいむがすごい驚いている。

「わあ、浮いたういた！」れいねが喜びながらそう言つた。

「れいねの術の基準はどうなつてんだ」とれいむが驚いたよつこに言った。

「こんな魔術の基準の人は初めてみた。」幸秋が珍しがるように言った。

「（だらうな…）」とれいむが心中で呟いた。

その間、ずっと横で浮いた！浮いたぞ！とれいねが興奮氣味に言つていた。

PM5：30

ピーンポーン

「はーい。」夕飯のしたくをいつの間にか始めていた、かずみがハンカチで手を拭きながら玄関に向つた。「あら、いづみさん。」とかずみが言つた時いづみの表情で何を言つたか察したのか、「おじいちゃんなら、中にはいますよ。」と手を拭いていたハンカチをポケットにしまいながらかずみが言つた。

「すみません。こんな夕方まで…」といづみが申し訳なさそうに言いながら頭を下げた。

「いえいえ、子供達の相手してくれてるので、全然平氣ですよ」とかずみが微笑みながら言つた。

「どうぞ。」かずみが和室に案内しそう言った。

「おじいちゃん、何で勝手にお邪魔してるので…？」いづみが何回言つたら分かるの。と言つように言った。

「ああ、別にいいよ、ね？ かずみさん」と幸秋がかずみに助けを求める。

「別にいいよねじゃないわよ… もう5・30よ。」とへ理屈ばかり言つ、幸秋に激怒した。

「ああ、もうそんな時間かあ、悪い悪い。」と適当にいづみに謝ると立ち上がり「じゃあ、かずみさん、ありがとひざました」とかずみに一礼した。

「バイバイ。じいちゃん！」とれいねが言つのに答えるように幸秋が手を軽くふりながら、玄関の方へ向かう。

「じゃあ、また今度！」と幸秋がかずみに言つ。

「すみませんでした、長々と」といづみが深々と頭を下げ家をあとにした。

PM 7:00

「ただいまー」れいむとれいねの父親の菊秋が家に帰宅した。

しかし食事中なのが誰も玄関に向かえに来ない。

「オイ、玄関に向かえくらいこいよ…」菊秋がかずみにそつ言つた。しかし、かずみはその話に一切触れず菊秋の方を向いて「ご飯、冷めるよ」と言つてまた黙々とご飯を食べ始めた。

「わかつてつからーてかこつちの言つた事は無視かよ！？」菊秋が無視された事に怒りながらも、いつも夕食の時に座っている自分のとくとう席に座り夕食を食べ始めた。

その時…幸秋宅では…

「おじいちゃん、何で勝手に人の家行っちゃうの？子供ですか？」
居間でいずみが幸秋を怒鳴つてゐる。

「あー、まあまあ」幸秋がテレビを見ながら、いすみを抑えようとする。

「まあまあ、じゃないわよ！」いずみがすこい汗をたらしながら、幸秋に怒鳴り散らした。

「悪い、悪かったから。怒鳴り散らすな。」と適当に幸秋がそう言つ。

「…、はあ、まあいいや。明日…来子さん帰つてくるし」いずみが冷静になつてそう言つた。

「えつ、明日帰つてくるの！？」幸秋が顔色をえてそう言つた。

「そうよ。」いずみが急に声色をえてそう言つた。

「頼む、この通りだ。来子には言わないでくれ！」さつきまで、あんなのんきにくつりいでいた幸秋が、土下座をして手を合わせていずみに頼む。

いずみも相当頭に來ていたのだろうか「嫌です」と即答した。

「勘弁してくれ…」こんなやり取りが続いたあげく、夜が明けて…

幸秋がふらふらしながら外に出て菊秋の家に向かう。

ピーンポーン…

「誰？こんな朝早く…」とまだ寝ていた、かずみがそう言つながら

AM 6:00

玄関に向かつ。

「はーい……」と言つても返事がない。「どうじゅう様ですか?」とかずみが言つた時、ゆっくりドアが開く。

「か……す……みや……」幸秋が力なくかずみを呼んだ。

「えつ、おじいちゃん!?」とかずみが言いながら、慌てて菊秋のところへ向かつ。

「あなた、起きて!」とかずみが無理矢理菊秋を起こす。

「何だよ……」と菊秋が寝ぼけながら言つ。

「おじいちゃんが、玄関で倒れた!」かずみが菊秋に慌てながらそう言つ。

「はあ? !」と菊秋が同様しながら言つ。

「親父どうした?」と言つと「來子が帰つてくる」と幸秋がすうとう恐怖に怯えるようにそう言つた。

「……」無言のまま菊秋が去つて行つた。

【第1話】浮遊術練習ーー? (後書き)

どうでしたか? 感想もらえたと嬉しいです!
好評でしたら続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5223ba/>

魔術師!!REINE

2012年1月14日16時51分発行